



若林座

豊田市
郷土資料館
だより
No.43

Toyota City Museum
Of
Local History



目次

- ・企画展「館蔵・又日庵展〜稲本林氏寄贈資料を中心に〜」—— 2
- ・あの頃の娯楽 歌舞伎・芝居・浪曲・映画 劇場 若林座 資料紹介—— 3
- ・郷土史調査レポート・寄稿 「旧枝下用水路」の遺構—— 4・5
- ・特別展「白瀬中尉の南極探検」レポート
- 明治に起こった南極ブーム—— 6
- ・拳母藩と刀工源直義について—— 7
- ・文化財シリーズ・資料館ニュース—— 8



「館蔵・又日庵展～稲本林氏寄贈資料を中心に～」

平成11年12月11日、豊田市に又日庵^{ゆうじつあん}関係資料の一点が寄贈されました。不思議と手になじむ黒楽平茶碗と出会って、以来、10年近く研究が続けられている稲本^{しのべ}林氏からの寄贈でした。稲本氏は研究が続けられる中で、茶道具に限らず書簡や古文書も収集されてきました。さらに、氏は又日庵を地域の人々や茶道に親しむ人々に知ってもらおうと裏千家から講師を招いて文化講演会を開催したり、顕彰茶会を催したりと活動を続けられてきました。

今回は、稲本氏の研究の核ともいべき寄贈資料を中心に、これまで豊田市郷土資料館が収集してきた又日庵とその弟で裏千家11代家元^{げんげんさい}玄々斎宗室に関する資料を展示します。



又日庵・渡邊規綱画像

又日庵・渡邊規綱について

又日庵こと渡邊規綱^{のりつな}は、寺部渡邊家11代当主です。寺部渡邊家は、徳川家康に仕えた渡邊半蔵守綱を初代とする家です。江戸時代になって家康から尾張名古屋藩の付家老を命じられ、以後代々寺部(豊田市寺部町)に陣屋を置いて尾張藩の重臣として活躍しました。

11代目渡邊規綱は、奥殿藩松平乗友の子で13歳の時寺部領主であった叔父渡邊綱光(1688-1755)の養子となり文化元年(1804)に寺部渡邊家11代を継ぎました。又日庵は、実弟・玄々斎が裏千家に養子し、11代家元となったことも影響して茶道に造詣が深くさまざまな茶道具をのこしています。

茶人としての又日庵

又日庵は、こうした立場から尾張藩の茶道興隆に大きな役割を果たしていたと考えられます。天保11年(1840)に尾張11代藩主となった徳川斉荘は、玄々斎と親しく交流し、尾張藩の茶湯が裏千家流にまとめられ

たことが知られていますが、こうした尾張藩と裏千家との架け橋となったのが、又日庵であったと思われます。

今回の展示資料・稲本氏寄贈資料の1つに「又日庵・玄々斎往復書簡軸」があります。又日庵が、香合の事で尾張公から尋ねられた件について玄々斎に問合せているもので、又日庵と玄々斎、さらに又日庵を通じた尾張藩主との関係をよく表した資料として興味深いものです。

又日庵の茶碗

又日庵は文政11年(1828)に、隠居し、その後名古屋大曾根の別邸芝山荘内に窯を築いて、陶器を焼き、常滑の陶工・上村白^{しろ}や京都の楽家九代了入を招いて指導を受けています。(宗玄焼)こうしたことから、又日庵の茶碗の多くは、楽焼系の茶碗です。



又日庵作「平茶碗。(稲本氏寄贈)」

展示では、又日庵作の黒楽茶碗が一点展示されます。このうち丸に「大」の印が押された茶碗が大曾根で焼かれた茶碗です。手で土を捏ねて形つくられた茶碗は、1つ1つ異なる景色を見せ、陶器でありながらどこか柔らかく、温かみのある作品です。今回の展示を通して郷土ゆかりの茶人をより多くの方に知っていただければ幸いです。

会 期：平成16年1月31日(土)～3月14日(日)

会 場：豊田市郷土資料館 第二展示室
月曜休館

観覧料：無料

(伊藤智子)

劇場 若林座 資料紹介

大正から昭和にかけて、各地に劇場がつくられ、歌舞伎や芝居、浪曲、映画など庶民の娯楽の殿堂として地域の文化発展に寄与してきました。昭和3年に高岡村（現在の若林東町）にできた若林座もそうした劇場のひとつです。（資料提供 中野紀和男氏）

若林座



若林座は、高岡村で製粉業を営んでいた中野登一が、昭和3年に創業した劇場です。歌舞伎や芝居・浪曲・映画などを上演し人気を博しました。

その後の娯楽の多様化、伊勢湾台風の被害により、昭和13年に廃業となりました。

幕（雪遠見）



本号表紙の宣伝幕を始め、歌舞伎や芝居の背景に使用した「雪遠見」、「城遠見」、「桜遠見」、「吉原」、「野づら」など6枚の幕が保存されています。

ポスター

昭和3年頃に興行された映画のポスター「アチャコ青春手帳 大阪篇（昭和3年11月製作、新東宝・吉本興行提携作品）」

■監督 野村浩将

■出演 花菱アチャコ 左幸子、大泉滉など



広告団扇

夏の鑑賞に欠かせないのが団扇。竹製で片面には女優などの絵が印刷され、一方にはスポンサーの商店名が印刷されています。



手燭と下足札



客席は1階が1畳、2階はその半分位の広さでした。下足札は11番まであり、劇場の規模が推定できます。

菅笠

芝居の定番は、股旅もので、笠は必需品です。深編笠や三度笠、一文字笠などが使われました。



（蟹 一夫）

企画展

あの頃の娯楽—歌舞伎・芝居・浪曲・映画—

劇場 若林座

会期

平成17年1月16日(火) 21日(日)

※1月17日を除く月曜日休館

場所

豊田市棒の手会館 特別展示室

入場料

無料

主な展示品

舞台幕、ポスター、宣伝団扇、芝居用小道具（舞扇、舞踊面、笠）写真、文書

旧「枝下用水路」の遺構

鈴木 功

現行の「^{しだれ}枝下用水」は、矢作川中流の「越戸ダム」を水源とし、豊田市域の中央部を北から南へと貫流する重要な灌漑施設です。その規模は、基幹ルートに東、中、西用水などを併せて延べ約10kmにおよび、100年以上にわたって、優に1,000haの農地を潤し続けてきました。この灌漑事業には、郷土の先覚者と西沢真蔵翁をはじめ多くの人々が、多年にわたる苦難にめげず、命を賭して取り組んできた尊い魂がこもっていることは周知のところ

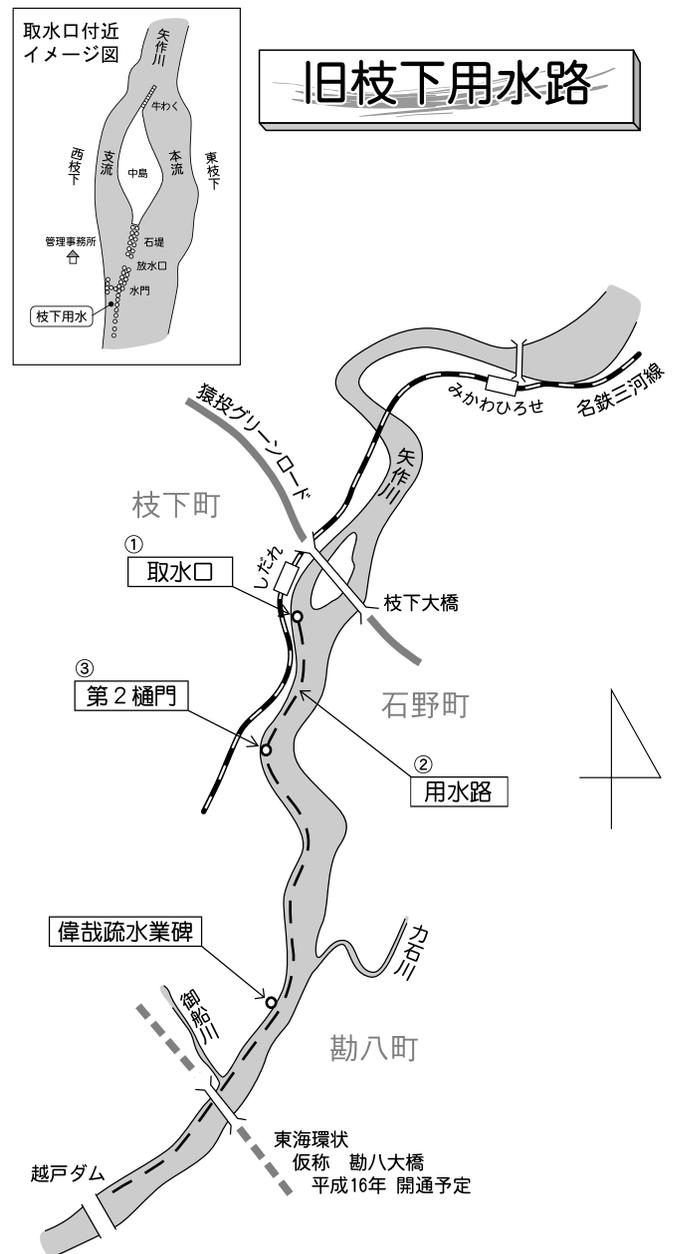
です。枝下用水の着工は明治11年(1878)頃で、同14年(1881)には四郷あたりまでの約5kmに通水するに至りました。同17年(1884)枝下用水が全通した当時は、越戸にダムを建設する計画はもちろんありませんでした。取水口は現在の位置よりも約5km上流の西枝下(現豊田市枝下町)に設けられたのです。その頃の枝下あたりの矢作川は、両岸が無数の巨岩に覆われ、その狭間を激流が奔る峡谷のような場所であったようです。^{いのこわし}猪渡、一の瀬と呼ばれた筏師泣かせの難所があったそうです。用水はこの激流を見下ろす右岸の山すそを開削して造られました。

その後昭和11年(1936)に越戸ダムが完成されたことにより、取水口がこちらへ移行されることとなりました。したがって、西枝下から越戸ダムまでの水路は約半世紀間の役目を終え、今その跡はダム湖の底に静かに眠っています。しかし、人々から忘れ去られようとしているこの区間の遺構こそ、いわば枝下用水灌漑事業の原点であり、私たちの父祖の生活と、たゆまぬ努力の跡を偲ぶことができる貴重な文化遺産ではないかと思うのです。

去る平成17年11月、この遺構を踏査する機会を得ましたので以下にまとめてみます。

1 取水口跡付近(豊田市枝下町)

現在の「枝下町公民館」の敷地内には、かつて「枝下用水管理事務所」が設けられていました。その公民館の前から、けもの道のような急坂を降りると矢作川の



右岸に出ます。ここが100年近くも前に造られた取水口跡です。岸辺の水面から少し頭を出した岩が流れに沿って点在し、それを結ぶように石が積み上げられています。先端の岩の両側には、縦向きに溝が彫られています。幅約2m程度の板をはめ込んで水量を調節した水門の跡です。これが第一樋門といわれたもので、矢作川の水勢や洪水に耐え、今も原形の一部を留めています。

すぐ上流には大きな島(中州)が見えます。地元ではこの島を「^{なかじま}中島」と呼んでいます。「中島」を挟んで川の

流れは左右両方に分かれています、左側が本流で、右側は支流でした。水の流れを右岸の取水口へと導き寄せ、用水の必要水量を確保するために、¹中島、の上手に²牛わく、という仕掛けが敷設してありました。³牛わく、があった川底は、今でも河原から拾い集めた丸い石で盛り上がっているのが見てとれます。

2 用水路跡(豊田市枝下町・御船町)

この取水口から下流にかけての用水路跡は、その大部分が水没していて、水面からわずかに見える頭部が確認できるだけです。全容ははっきりとはわかりませんが、構造的には、山側は概ね素掘りで、川に面した左側は石積みの堤防となっています。明治用水の堰堤と同じように、人造石工法も採用されたものと思われます。今後、この用水路の全容が解明されることを願ってやみません。

3 「第二樋門跡」付近(豊田市御船町)

取水口から1kmほど下流の¹第二樋門跡、あたりは、川が大きく左へ蛇行して、洪水時には激流に直接曝されるような場所にあります。したがって石積みの堤防ではとても持ちこたえることができず、そのためこの部分は山の間を開削して水路が造られました。

幅²、長さ³ほどのこの水路は、兩岸とも高さ⁴の厚い岩盤となっており、見る者を圧倒します。用水路が完成した当時の姿そのままに残されているのですが、近年はこのあたりへ訪れる人もなく、人跡未踏の地のような様相を呈しています。



山の間を開削して造られた用水路

水路の入口には、山側の岩からつないだ石垣によって構築された水門があります。高さ¹、幅²、長さ³ほどの頑丈なこの石垣の中央部には、⁴第二樋門、と刻まれた立派な銘板が今も残されています。

水面を覗くと、導水口の頭部が透けて見えます。この樋門が稼動していたときには、導水口を開閉する装

置が取り付けられていたそうです。しかし、この装置は鉄製だったために、惜しいことに戦時中に撤収・軍用に供出され、今は石枠が残っているだけです。



第二樋門跡



銘板

以上に述べた一連の用水路遺構は、開削の当初からこのように立派な構造ではなかったであろうと思います。特に堤の仕様はもっと簡素なものであったと想像されますし、いったん雨が降ると、山の土砂が流れ込んで水路が埋まったりしたことも再三だったことでしょう。折角築いた堤防も頻繁に決壊して、造っては壊れ、壊れては修理するの繰り返しだったはずで、開削も補修も、現代のような土木機械のない時代のこととて、ツルハシやスコップ、モッコなどによる手作業だったわけですから、通水に至るまでには、言葉に言い尽くせぬ苦勞が伴ったに違いありません。また通水後にも、矢作川の度重なる洪水によって壊滅的な打撃を受けたこともあり、こうした苦い経験に基づいて改良に改良を重ねた結果、この用水路は今日のような姿に結実したことを思わないではいられません。

まことにこの旧枝下用水路には、いく度もの辛酸を経てしかもなお志固く初心を貫いた父祖の魂が染み込んでいるのです。今改めてその遺徳に学びつつ、郷土の歴史と文化に関する大切な遺産を、後世に語り継いでいかなければならないと痛感しています。

本調査に際し、ご多用中わざわざ現地をご案内いただきました枝下町・三宅寛氏、菅沼一郎氏ご夫妻、勘八町・山田武代氏、力石町・沢田豊治氏、愛知郡東郷町・中村博之氏に、紙面をお借りして厚くお礼申し上げます。

(参考) 1 西加茂郡誌 (大正11年)

2 1 だけ用水 通水100年記念 (昭和11年)



白瀬中尉の妻の白瀬しらせ(1914)

秋田県金浦町出身の陸軍中尉。明治43年、日本人として初めて南極に上陸した。昭和2年、豊田で没す。

特別展「白瀬中尉の南極探検」レポート

明治に起こった南極ブーム

平成11年11月21日(11月21日)に開催された特別展「白瀬

中尉の南極探検」が盛況のうちに幕を閉じました。探検で使用された、カラフト犬の毛皮で作った寝袋をはじめ、文書・写真・映像等の資料約170点を展示し、多くの方に“豊田で最期を迎えた明治の探検王”を知っていただく機会となりました。

今年から南極にはNHKの放送センターができ、リアルタイムな南極の状況が発信されるようになりました。オーロラをはじめ南極の自然をとらえた映像が、しばしばお茶の間を沸かす今日ですが、日本の一般大衆に南極への関心が広まったのは、白瀬中尉が南極探検計画を発表した明治33年が最初ではないでしょうか。明治の末、日本に巻き起こった「南極ブーム」を垣間見てみましょう。

政府が援助金を全く支給してくれなかったため、国民に訴えて探検費を募ることにした白瀬中尉は、明治33年(1900)11月21日、東京・神田の錦輝館で「南極探検計画発表演説会」を開きます。この演説会は、1千人を超える聴衆が詰めかけるという大盛況。のちに後援会長となる大隈重信をはじめ、賛同者たちの応援演説が繰り広げられました。翌日の新聞には「南極探検発表会」(未曾有の大人気)感極つて涕泣す(東京朝日新聞)と題した記事もみられ、南極探検に対する国民の好奇と熱狂がうかがえます。この演説会を発端に、新聞社を核とした募金活動が全国的に展開され、また

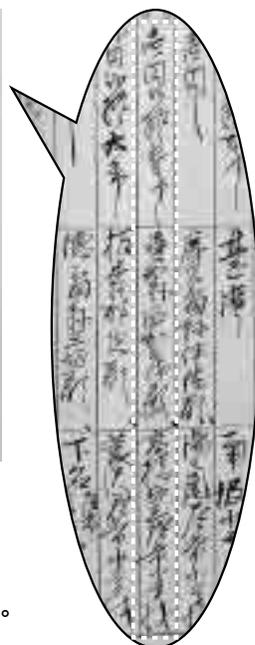
寄付金集めの応援演説会や、芝居などによる特別興行も催されました。当時の東京朝日新聞に設けられていた寄付金の芳名欄を見ると、日ごとにそのスペースが増しており、世論の盛り上がりが見て取れます。

今回展示した資料のうち、「寄附金品記入帳」も当時の南極ブームを垣間見ることのできる資料です。これには主に学校からの寄付金が記載されており、全国津々浦々から寄付金が寄せられていたことが分かります。



寄附金品記入帳

高橋第三尋常小学校(現野見小学校)は、後援会に一円二十五銭の寄付をしている。



す。この中には上郷第三尋常小学校(現 畷部小学校)、高橋第三尋常小学校(現 野見小学校)、石野第四尋常小学校(現 藤沢小学校)など、現在の豊田市の小学校名も見られます。

白瀬中尉の南極探検から3年後、昭和の日本に再び南極ブームが起こりました。国際的な南極観測事業に日本も参加することになったのです。このときも多くの国民や企業から寄付金が寄せられました。

昭和22年、第1次南極観測隊長永田武の下、観測船「宗谷」で南極をめざした日本人は、オングル島に日の丸を翻(ひるがえ)しました。ここに「南極観測」という今日に繋がる新たな歴史が始まったのです。

(成瀬憲作)



演説会場内(東京・錦輝館)

東京朝日新聞 明治43年7月6日



拳母藩と刀工源直義について

武士の魂、日本刀は単に武器としてではなく、美しい鑑賞用としても親しまれてきました。江戸時代、各城下には刀工がすみ、刀を打っていました。雄藩ではたくさんの刀工が抱えられ、名工が輩出しています。拳母城下におきましても源直義みなもとのおよしと名のる刀工のいたことが知られています。今回その直義銘の刀剣を郷土資料として収蔵することができましたので紹介します。

刀は新々刀で長さ1尺1寸、反り1寸、目釘穴1個、鑄造り、反りはあさく、地金は板目肌、刃文は互の目、切先は小丸。伝統的、正統な鍛えて地味ではあるが、力強い質感のある刀身です。良好な保存状態で次のように銘がきられています。

(表) 泉心子源直義造之

(裏) 元治二年仲春日

作者の直義(直吉)は幕末から明治の刀工。尾張刀工譜(名古屋市教委、昭和33年刊)によれば、生地は明らかではありませんが、はじめ江戸根岸に住し、のち名古屋に移り、さらに三河拳母に住みました。大慶直胤および寿格の門下、本名山口徹弥太。号泉心子、嘉永年間に松前藩に招かれ移住、函館戦争後、日高の浦河に隠棲、73歳で没したといわれています。

直義は師の直胤が水心子川部正秀の弟子であることから、水心子一門の刀工に属します。正秀は幕末の、南北朝期の古刀を理想とする復古刀運動の創始者で新々刀の名匠として著名です。元治二年銘の本刀は松前在住期の作品とおもわれます。

拳母藩と水心子一門との関わりについて 拳母藩

史(豊田史料叢書、平成14年豊田市教委刊)弘化二(1819)年八月朔日の条に次のような記述があります。

刀工河部北司正次 水心子秋元但馬守殿家来

ヲ招聘セラル、是ヨリ数回罷出、其父水心

門弟莊司美濃兵衛直胤亦召サル、拳母二来ル

文中河部は水心子正秀家の姓川部で、北司は姓、正次は三代目、正秀の孫。水心子はここでは水心子の誤記(?)、秋元但馬守家来は初代より秋元家(山形藩六万石)に抱えられて、其父は正秀の義父(直胤の娘は正秀の妻)、水心子門弟の莊司は姓で本来は庄司と記し、美濃兵衛は直胤の本名箕兵衛を表します。

要約すると弘化二年、内藤家五代藩主政優の治世に、刀工水心子正秀の三代目(孫)正次を招き、以後数回招聘、正秀の義父である大慶直胤も招き、実際に拳母に来たという記述です。直胤の打った刀に「コロモ」の銘のある例も知られています。時の藩主は武芸の奨励にたいへん力をいれたとして著名です。

このような歴史的な背景があって、一門とゆかりのあった拳母に直義が住んだことがうなずけるでしょう。明確な根拠はありませんが、一門が招かれた経緯から拳母藩お抱えの刀工であった可能性は高いと思われます。在住期間は明らかではありませんが、これまでに直義が拳母で打ったといわれる刀が2口知られており、その紀年銘から嘉永2、3年頃までは拳母にいたと推測されます。

その後、どのような事情があったかはわかりませんが松前藩に招かれ北海道に渡っています。松前においても作刀をつづけ、優品を残しています。

松前藩士の注文に応じて打った2口の刀が北海道松前町の有形文化財に指定されています。

(松井孝宗)



直義銘刀



シデコブシは、モクレン科に属する落葉広葉樹です。花は径10cmで、11月頃、葉に先立って咲き、白または薄紅色の細長い花弁を10〜15枚つけます。花弁が神前に供える玉串や注連縄につける幣ににていることからこの名があります。

東海地方の丘陵にある低湿地とその周辺には、一般に東海丘陵要素植物群が生育しており、シデコブシはこの植物群の代表的な種です。その分布は愛知県(渥美半島・西三河・尾張東部の丘陵地)、岐阜県(美濃地方中・東部)、三重県(北部)にほぼ限られています。

琴平町のシデコブシ自生地は沢筋を中心に100株が認められ、尾張半島と西三河では最大規模となっ

文化財シリーズ



ことひらちょう
琴平町のシデコブシ自生地
(県指定文化財)

ています。

また、一般的にシデコブシ自生地は不安定な砂礫の湿地に生えるために低木が多いのに対し、琴平町シデコブシ自生地は硬い花崗岩を基盤としているため総じて高木となっています。里山の湿地は宅地開発により姿を消すこと

が少なくありませんが、琴平町シデコブシ自生地はシデコブシのほかにも植物があり、この西三河地方の里山の湿地の特徴をよく示しています。

平成12年に「琴平町のシデコブシ自生地」が、豊田市の指定文化財(天然記念物)に指定されましたが、平成17年3月31日に、愛知県指定文化財に指定されました。

資料館NEWS

文化財指定

郷土資料館だより11号で紹介した「木造阿弥陀如来立像(附胎内納入品)」が豊田市指定有形文化財(彫刻)として平成17年11月1日に指定されました。

『白瀬中尉の南極探検』ポイントラリー終了

特別展「白瀬中尉の南極探検」にあわせ、白瀬中尉のポイントラリーを開催しました。

これは、ポイントを探しながらラリーをしていくことで、白瀬中尉の人となりや南極探検についてわかるものです。11月20日〜12月7日の会期中、300名の子どもたちが参加してくれました。

ポイントラリーをとおして、「初めて知った人なのに、少ないじかんで知ることができてよかった」、「1度だめでもあきらめないことが心に残った」、「白瀬中尉をみて、その人たちは、すごいなおもいました。でも、さいごはなくなってしまったなんて、かわいそうだとおもいました。やっぱり、生きるためにがんばったのがこころにのこりました。」など様々な意見が寄せられました。

また南極の氷や南極の石を触れるコーナーも人気のコーナーとなりました。

利用案内

開館時間 10:00〜17:00

休館日 毎週月曜日(祝祭日は開館)、年末年始

入場料 無料(ただし特別展開催中は有料となります)

交通 名鉄「梅坪駅」より南へ 徒歩10分

名鉄「豊田市駅」より北へ 徒歩10分

愛知環状鉄道「新豊田駅」より北へ 徒歩10分

■豊田市郷土資料館だより No.46■

平成17年1月1日発行

編集発行 豊田市郷土資料館

〒431-0001 豊田市陣中町1-1

☎(0535)21-0001 〃(0535)21-0011

E-mail: info@city.toyota.lg.jp

URL: http://www.city.toyota.lg.jp